

くろつけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十五年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九卷十号（通巻第二二六号）

鈴



くろつけ

俳句雑誌

GLOCKE

第226号

2. 2013

海苔を搔く

品川 鈴子

海苔を搔く疎開のままに縁付きて

頸椎症上目遣ひに牡丹雪

女流作家の廻り椅子牡丹雪

芝焼かる後楽園の鳥獣塚



露の臺百閒川の土手に摘む

兄在らば背丈際だつ長マフラー

悴みて取り落とす陶好きな順

火吹き竹国籍棄てし息籠めて

骨埋める国へ飛雪のタラップ踏む

日の丸の揺れに薄目のかじけ猫



玉鈴

吟

愛媛 福島松子

手を繋ぐ卒寿の夫婦菊日和
野の花の花束並ぶ秋の市
コスモスにガードレールの隠さるる
老猫の動き緩やか秋湿り
恭しき乾杯続く菊の宴

愛媛 福田かよ子

山錦繡花嫁と見し秋高き
色染めし枝大瓶に栗御飯
縮緬の波立つ諏訪湖秋深し
外人も並びて試飲新走り
連枷からざおで大豆打つ婆休まざり

兵庫 藤井久仁子

神の苑据ゑる炭火の献茶式
八寸の山海珍味紅葉添へ
降り止まぬ櫺の黄落氷ノ山
団栗や踏まれて笑ふ心立て
門ごとに敷かれしアート金木犀

兵庫 藤田かもめ

旅なかば三里の灸と菊枕
環濠の口に野地蔵小六月
連歌所の門扉開かる宗祇の忌
俳諧も舌頭千転空也の忌
そぞろ寒絵解比丘尼の指す地獄

兵庫 史あかり

覚えなき差出人や鵬高音
頬づゑの秋思の膝に犬乗り来
どんぐりに子の体温の移りゆく
渋抜かれ渋柿市民権を得る
散紅葉磴百段へ惜しみなく

兵庫 古井公代

大暖炉広間の額に王も妃イキキスルも
藁屋根に陶の三毛猫秋の雲
応へなき病む人の指身に沁ヘキリスの指きみる
警官は白馬で闊歩霧ロンドンの街
汁椀にひらり松茸寺の膳

大坂 古林田鶴子

辞書を繰る見なれぬ文字や金木犀
色鳥の姿似し葉に目をこらす
処方さる葉の減りて柿たわわ
傘寿なる智恵も細りて萩むぐら
宅地化に秋草描きし影も消え

兵庫 細川知子

秋祭太鼓打たせてもらへし子
馬肥ゆる出臍が少しめだたざる
いわし雲エルメス店に旗の立つ
園丁は雲の仙人松手入
美術展ロダンのポーズまねてみる

兵庫 細野恵久

輸送車に乗る寒明けの競走馬
薄氷の刃のごとく生れにけり
咳に背がくしやみに腹がこたふるよ
乳牛の遠くに見えて堤焼く
降り積むは常磐木にこそ春の雪

愛媛 松井洋子

捨て湯流る蔵王の宵のやや寒し
不機嫌の訳は婚約とろろ汁
願ふこと止めて久しき流れ星
烏籠の小鳥は知らず秋の天
目はせぬ街の往来そぞろ寒

埼玉 松本清川

ふくよかな石仏囲む冬木立
終バスの客吾一人暮の秋
冬晴れや稜線確と八海山
曼殊沙華江戸の後期の長屋門
薄紅葉導師五人の声揃ひ

東京 松本アイ

診察券一枚ふえて九月尽
謎の笑み色なき風の白杵仏
醉芙蓉今朝は真白に知らぬふり
腹みせてころがる蟬の如何な生
外に出でてたちまち秋の蚊の餌食

愛媛 松本恒子

行く秋の一段高き特攻の碑
焼酎の試飲に酔ひし磯千鳥
砂風呂に頭並べて神無月
篤姫の浜庭園の菊人形
野良猫に一声かけて落葉掃く

愛媛 三浦澄江

原発の岬彩る石路の花
つぶやきは祈りにも似て秋落葉
甘える事下手な生き方秋薔薇
気負はずに生きて夕餉の芋の粥
木洩れ日のやうな余生や木の芽和へ

兵庫 三枝邦光

昔日の連隊本部銀杏散る
鉄塔の唸りかすかに枯野原
遠望の音戸大橋冬茜
小春風大道芸のジャグリング
夕さりの銀杏もみぢに煉瓦館

兵庫 水野 弘

落葉踏み入院棟に妻訪ね
薄氷に犬も走らぬ朝の道
友逝きて枯れし涙の一人旅
秋空を二つに分ける飛行雲
鉢巻を振り直して村祭

香川 三橋 早苗

薄紅葉この山門に利休像
松手入れ終へし境内茶筌塚
黒猫のそばにこつんと木の実落つ
幼子は素手でそうつと藪を掘る
爐紅葉自転車旅の弾む息

茨城 三輪 慶子

白足袋や摺り跡しるき能舞台
初時雨北山杉の幹の色
ばつたんこ途切れし会話埋めてをり
シヨール拵げ言葉の刺を躲しけり
両手もて軽く榎櫃を挽ぎにけり

埼玉 向江 醇子

六十余秋巡り来て夫婦かな
亡き父の植系たる柿を供へけり
秋の空飛行船と鴉飛ぶ
食べ頃の落果残して野分去る
朝のカフェ豆挽く音ぞ秋深し

兵庫 村田とくみ

それぞれの夜具足す夕べ末の秋
颯風裡厨の整理捲れり
母の胸まさぐるやや秋の雷
信楽焼狸を囲み秋桜
裏年の実無し柿只葉の紅き

佐賀 森田 子月

ひらきつつ銀河でありぬ菊の花
吾をすくふこの茶の温み冬日和
過去にさようならと明日日向ぼこ
不安さへペンで捨てされ凍へ身よ
自由とは危うきものか柿実る

大阪 師岡 洋子

文化の日畳に椅子の並べあり
筆先の割れをなだめて夜長し
冬支度母の遺せし紐いろいろ
箒目に朝の力や冬はじめ
癩性に格子拭きあげ路地小春

東京 安田とし子

齡積むはおろそかならず帰り花
捜しもの捜しあぐねて日の短か
おでん鍋蒟蒻箸に逃げ易し
蘆枯るるきのふの憂さを水に捨て
枯蟻螂奔りて草に紛れたり

愛媛 梁瀬照恵

独り住む白き一部屋秋に入る
積乱雲よぎる爆音基地の街
旅にゐて全天占める鱗雲
無音なるビルの合間を登る月
山の端を出てこそよけれ望の月

香川 横内かよこ

泡立草留学生のすぐ馴染む
唐辛子いちばん痛きところ突く
古傷にふいに触れられ秋愁ひ
一葉落つ洗ひに出さる桐箆笥
落人の郷なる生まれななかも

大阪 吉田和子

秋祭り屋台の裏手ひつそりと
山車たんどりの幼居眠りしつつかき
生け垣の傾ぎて山車走り抜け
運動会ママが転びて児が泣けり
峠越え実にも刺ある山茨

兵庫 明石文子

入り口を稲穂で囲む道の駅
いちにちを黄葉づくめの旅終へて
段丘の地形の果の峽黄葉
魚沼で新米求め安堵せり
干大根やがての我身ここにあり

兵庫 秋田直巳

リハビリのベッドに仰ぐ秋の月
リハビリのシューズに替へて秋一步
包帯を換へて傷口さはやかに
湯上りに足の爪切る夜の秋
残業の会社を出れば月明り

愛媛 足利淳子

初秋刀魚一尾が余る齡なり
病む友や転居の友と秋寂し
俳句帖埋らぬ儘に冬の雷
寒波来てたった四人の俳句会
庭手入れ花まで引かれ杜鵑草

兵庫 荒木治代

分け入れば落葉に沈む木の根道
己が根に落葉敷詰め木々眠る
土間寒し止まりしままの古時計
日暮はや足早に辞す飛驒の里
バス待つや一人冬田の只中に

鈴の奏

品川鈴子選

母と見し寂光院の照紅葉 大阪 八幡 操

懸命にこの世を生きて草紅葉

霜月のざわめくカフエの奥の席

ねんねこで負ひし娘は古希となり

アッシジの僧院の鐘今朝の冬 兵庫 前田 玲子

石畳アッシジの霜二千年

元気犬北風小僧に叩かれよ

消炭を次の火種に炭をつぐ

たくわん漬摘み旅路の荷をほどく 香川 吉井 潤

早立ちの印となりぬ帰り花

友の持つ才を疎みて枯木立

菊枯るる喧嘩の訳を忘れたり

土手小春珊瑚使節のゆきし径 沖縄 高橋 照葉

漱石の伊予の出湯へ刈田道

ベレー帽替へて異郷の冬の街

ねこじやらし呼べばこちらへ向き直る

目覚めては子の夜具なおす夜半の秋 兵庫 大西 和子

秋うらら酒豪番付前頭

桜紅葉素屋根の天守囲みたる

お任せの料理なかばに茸汁

銀杏を踏み踏み来たり友の靴 神奈川 山本久美子

銀杏を踏み潰し靴玄関に

今日是我明日は夫行く冬の葬

明日食すおでん今日より煮込む我

手足伸びターンもきめて秋舞台 兵庫 中村 吟子

老いどちの話し好きなるぬくめ酒

開かずの間開けば秋風息子をり

新米の届き探すは母の本

田の神に刈り残しある曼珠沙華 高知 川村 嘉章

鳥渡る天寿とありし喪の知らせ

秋の蚊やペンを走らす手を刺して

柿吊るし平氏の裔の守る里

肺にあるしこり何物木の实踏む 兵庫 岡田満喜子

友の言う一言に萎え蓼の花

短日の泣く児にひるむ叱り声

持て成しの無花果挽ぎて島の宿

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 島内 美佳 〃

*選句は全て 品川鈴子

ねんねこで負ひし娘は古希となり

八幡 操

菊枯るる喧嘩の訳を忘れたり

吉井 潤

かつて育て盛りころは、無我夢中で働いたことが懐かしい。たとえばねんねこで一番下の子をおんぶして、ミシンを踏み続けたのは、つい昨日の様に母子のリズムとなつて覚えているが、そのあどけない娘もいつしか古希の賀を迎えたとは。子達は、みな精いっぱい頑張つて立派に成長し、黙つて母を見習つたらしい。

菊はほかの花とは違つて花期が長く、葉は枯れても花は未だ名残をとどめ、いつまでも荖葉についているから、盛りの華やかさが偲ばれて一層哀れ。犬も食わぬ夫婦喧嘩なども、怒つて腹を立てた訳などすぐわすれて、枯れ菊の類かもしれない。

石畳アッシジの霜二千年

前田 玲子

土手小春冊封使節のゆきし径

高橋 照葉

アッシジはイタリア中部、ウンブリア州の都市で、聖フランチェスコの生地。マルチーニやジェトの壁画で名高い教会堂などがあり、信者にとつて二千年もまえの石畳を踏みと遙々聖地を訪れた喜びに浸る。

冊封使節とは、昔中国等で天子の勅を奉じて近隣の国に使いとして行き、その国王に封爵を授ける使節のことである。まるで土手を使節団が歩いていく姿が見えるような冬の暖かい日の様子である。衣擦れの音も聞こえてきそうだ。

目覚めては子の夜具なおす夜半の秋 大西 和子

秋になると就寝の時は暑くても、夜も更ける頃にはだんだんと涼しくなってくる。子どもは新陳代謝が活発でふとんをけるのがつきものである。ふとんを掛け直すのが親の務めだが、それが自然に出来るのも親ならでは。親に見守られて、子どももぐつぐつと眠れたことだろう。

銀杏を踏み踏み来たり友の靴

山本久美子

銀杏はいちようの実。中国原産で雄雌異株。球形の種子は九月頃熟し、黄葉した葉が散る頃落下する。中身は美味しく食せるが、外果皮は黄色く悪臭がある。友人が銀杏を踏み踏み訪ねて来た。玄関には独特の臭いが漂ってお互い顔を見合わせて笑っているのかもしれない。

手足伸びターンもきめて秋舞台

中村 吟子

秋になるとあちこちで文化祭や芸術祭が開かれる。気候もよくなり体を動かすのにもよい季節。舞台の上で踊り手は四肢を伸ばしターンも軽やかに、颯爽と踊っている。きつと最後のポーズも決めて、拍手喝采を浴びたことだろう。

秋の蚊やペンを走らす手を刺して

田村 嘉章

作者はペンを走らせ、夢中で何か文章を書いている。しかし、よりによって蚊がその手を刺すとは。夏の蚊より執念深さを感じる秋の蚊。うっとうしいブーンという音が聞こえてくるようだ。

持て成しの無花果掬ぎて島の宿

岡田満喜子

いちじくは実の中に無数の白色の小花がつくが、外から見えないので「無花果」と書かれる。掬ぎたての無花果は新鮮でみずみずしい。島の宿は大きかりなホテルと違って、細やかなもてなしが売り。掬ぎたての無花果は作者にとつて最高のもてなしになったに違いない。

セーターも持てと助言の旅支度

板倉真知子

旅行の準備をしていたら、後ろから「セーターも持っていたらどうか」と声がかかった。行き先は寒いだろうと想像してのひと言に、家族ならではの思いやりが感じられる。きつとそのセーターは旅先でも重宝したことだろう。